龔自珍論(三)

——再度の戒詩を中心として——

中村嘉弘

一

龔自珍は、嘉慶二十五年二十五歳の秋に詩作を断った。「戒詩」とみずからよぶこの行為は、詩人が詩人たることをやめるという、きわめて異常な行為であるといわねばならない。すでに前二稿で論じたごとく、自珍にとって、詩は憂愁を吐露して心を慰めるものではなく、さらなる深い憂愁に駆り立てるものであるがゆえに、戒められたのであった。かれは憂愁を根本から断とうとして、「今誓って爾の心を空にせん、心滅せば涙も亦た滅せん」(「戒詩五章」その二)とうたい、心を滅し尽して詩作を棄て、心の平安を仏教信仰に求めようとしたのであった。

しかしこの戒詩の誓いは、翌年の夏には破られ、再び詩作の世界に立ちもどることになったのである。誓いを破るに当って、みずからを弁明して「宥情」の一篇が書かれた。「宥情」は、心中の「沈沈たる陰気」から生ずる悲哀の情を、消滅し尽せぬがゆえにしばらく容認しようとして書かれたものであるが、それは同時に、憂愁の中に生き、憂愁をうたうことを意味した。戒は破られ、自珍は再び詩人として「文字の海に飄零」(「飄零行」)することになったのである。

詩作の世界に立ちもどった自珍の心は、再び憂愁に閉され、さらに三十二歳のとき、母の死が重なって憂愁が深まる。憂愁を断ち切るために再び詩は戒められねばならない。再度の戒詩は三十六歳のときのことである。

本稿では、この再度の戒詩を中心に、それ以降、己亥四十八歳のときに「己亥雑詩」三百三十五首が、堰を切ったように作られるにいたるまでの詩人について考察してみようと思う。

二

道光三年癸未、自珍三十二歳の七月、母が世を去った。自珍は故郷杭州で喪に服し、「仏弟子」（「助刊円覚経略疏願文」）として信仰の世界に生き、詩作を断った。編年詩に「癸未七月より乙酉十月に至るまで、憂に居るを以て詩無し」とみずから記している。

かれは喪のあけた道光五年（三十四歳）十月以降、待っていたように再び詩作を始め、その詩には深い憂愁がうたわれている。詩作を断った服喪の期間にも、かれの憂愁は増大し、その憂愁が再び詩作に駆り立てたというべきであろう。

自珍の詩作は、「己亥雑詩」を除くと、母の喪のあけた時期に最も集中する。『龔自珍全集』（一九七四、中華書局）によってみると、三十四歳（十月以降）に四首、三十五歳に四十七首、三十六歳に六十四首を数えるのである。これに次ぐ多作の時期は、第一回の戒詩の直前、二十九歳の四十三首、戒詩が破られた直後の三十七首である。

詩作を再開したかれの作品には、「賦憂患」「秋心三首」「寒月吟五首」（いずれも三十五歳の作）など、憂愁の深まりを示すものがある。「賦憂患」は次のようにうたっている。

故物人寰少　故物　人寰に少きに
猶蒙憂患俱　猶お憂患の俱にするを蒙る
春深恆作伴　春深くして恒に伴と作り
宵夢亦先驅　宵夢にも亦た先駆す
不逐年華改　年華を逐うて改まらず
難同逝水徂　逝水と同に徂き難し
多情誰似汝　多情　誰か汝に似たる
未忍託禳巫　未だ禳巫に託するに忍びず

人の世には、なじみの物など稀なのに、ありがたくも憂患だけは身について離れない。春の深まりの中にいつも連れ立ち、夜の夢にも先き駆けて現われる。歳月とともに、この関係が改まるでもなく、逝く水とともに流し去るのも難かしい。憂患よ、お前があまりに深情けなので、巫に頼んでお祓いをしてもらうわけにもいかないのだ。

「憂患」が「故物」であることは、「寒月吟」その二にも「皇天誤って矜寵し、汝に憂患の物を付す……憂患は吾が故物なり、明月は吾が故人なり」とうたわれ、また三十六歳の作「自春徂秋、偶有所触、拉雑書之、漫不詮次、得十五首」（春より秋に徂び、偶ま触るる所有り、拉雑して之れを書し、漫にして詮次せず）その十二にも

中年何寡歡　中年　何ぞ歓び寡き
心緒不縹緲　心緒　縹渺たらず
人事日齷齪　人事　日に齷齪として
獨笑時頗少　独り笑う時　頗る少し

といい、このころかれが深い憂愁を抱いて、「歓び寡き」日びを送っていたことがわかる。

これらの詩には、「憂患」そのものについて何も説明がないが、当時の自珍の境遇からかれの「憂患」が何に由来するのかを考えてみよう。

第一には母の死である。前稿にも述べたが、自珍は母の死について「癸秋以前　一天為り、癸秋以後　一天為り、天も亦た母無きの日月、地も亦た母無きの山川」（「元日書懐」三十六歳の作）と、母の死を境に天地さえも様相を異にしてしまったとうたっている。自珍の悲嘆の深さを知るべきであろう。次には、三十五歳のときの会試下第である。自珍は三十五歳の春に再び上京し、会試に応じたが失敗した。五度目の会試下第である。[1] この五度目の会試下第は、自珍にとって大きな痛手であったろう。母の死に加えて、たび重なる挫折は、かれを深い憂愁の淵に沈めたことは想像に難くないのである。

自珍が失敗を重ねながら、また帰隠の志を抱きながらなお京師にとどまり、会試にこだわり続けたのは、単なる個人的な栄達を望んだからではない。沈みゆく「衰世」にあって何らかをなそうとする憂国の情からであった。

人飲獲醉我獲醒　人は飲みて酔を獲るも我は醒を獲
逌然萬載難酩酊　逌然として万載　酩酊し難し
（「京師春盡夕、大雨書懐、曉起柬比鄰李太守威・吳舍人嵩梁」）

「衰世」にあって酩酊できぬ自珍は、醒めた目で現実を見、国を憂えるのである。「自春徂秋、偶有所觸、拉雜書之、漫不詮次、得十五首」その二には次のようにうたう。首六句を省略する。

四海變秋氣　四海　秋の気に変ずるに
一室難爲春　一室　春為り難し
宗周若蠢蠢　宗周　若し蠢蠢たらば
嫠緯燒爲塵[2]　嫠の緯は焼かれて塵と為らん
所以慷慨士　所以に慷慨の士は
不得不悲辛[3]　悲辛せざるを得ず
看花憶黃河　花を看ては黄河を憶い
對月思西秦[4]　月に対しては西秦を思う
貴官勿三思　貴官　三思する勿く
以我爲杞人　我を以て杞の人と為す

四海すべて秋に変じようというのに、一室だけがどうして春たり得ようか。周の王室が乱れて不安定ならば、寡婦はよこ糸の足らぬのを憂えず、国を憂えるだろう。なぜなら国が破れ家が亡びれば、その織り物も焼かれてしまうからだ。それゆえに「慷慨の士」は悲傷しないわけにはいかないのだ。花を見ては黄河の氾濫を思い、月に対しては西北方の乱を思いやるのだ。それなのにおえら方は深く思慮せず、わたしを天のくずれ落ちるのを心配した杞の人と同じにあつかうのだ。

かれの憂愁は、しかしかれを取りまく境遇のみに原因があるのではない。より根本的には、「陰気」の取り付いた病める魂に発するのである。

三

このころ、みずからの「神思」について述べた作品に「写神思銘」がある。「このころ」といったのは、制作時期が明らかでないからであるが、内容から推して、憂愁の最も深まったこの時期、三十五歳のころの作品と考えられ、また「写神思銘」中の語句が、このころの詩作品の語句とたがいに重なるか、近いものがあるからである。[5] 序に次のようにいう。

夫心靈之香、較溫於蘭蕙、神明之媚、絶嫮乎裙裾。殊呻窈吟、魂舒魄慘、殆有離故實、絶言語者焉。鄙人稟賦實沖、孕愁無竭、投閒簉乏、沉沉不樂。抽豪而吟、莫宣其緒、欹枕內聽、莫訟其情。謂懷古也、曾不朕乎詩書。謂感物也、豈能役乎鞶帨。將謂樂也、胡迭至而不和。將謂哀也、抑屢襲而無疚。徒乃漫漫漠漠、幽幽奇奇、覽鏡忽晞、顏色變矣。是知仁義坐忘、遠慚淵子之聖、美意延年、近謝郁生之哲。不可告也、矧可療也。爲銘以寫之。

夫れ心霊の香は、較や蘭蕙より温かく、神明の媚は、絶だ裙裾より嫮し。殊く呻き窈かに吟じ、魂舒べ魄慘めば、殆んど故実を離れ、言語を絶する者有り。鄙人稟賦実に沖しく、愁いを孕みて竭くる無く、閒に投じ乏れに簉きて、沉沉として楽しまず。豪を抽りて吟ずるも、其の緒を宣ぶる莫く、枕を欹てて内に聴くも、其の情を訟うる莫し。古を懐うと謂わんや、曾て詩書に朕さず。物に感ずと謂わんや、豈に能く鞶帨に役せられんや。将た楽しと謂わんや。胡んぞ迭も至りて和せざる、将た哀しと謂わんや、抑も屢ば襲いて疚む無し。徒らに乃ち漫漫漠漠、幽幽奇奇、鏡を覧て忽ち晞き、顏色変ず。是れ知る、仁義も坐して忘るること、遠く淵子の聖に慚じ、意を美しく年を延ぶるは、

近く郇生の哲に謝す。告ぐ可からず、矧んや療す可けんや。銘を為りて以て之を写す。

題に「神思」というのは、もとより「文心雕竜」神思篇にもとづくものであろう。それは詩人の精神のはたらき、想像力のことである。「神思」は自珍にとって、「蘭蕙」よりも「裙裾」（女性）よりも温かくうるわしいものである。しかし、それがひとたび発動すると、深く呻吟し魂魄は悲傷し、そのさまはほとんど前例もなく言語を絶するものである。「神思」はつねに憂愁を生み、その憂愁は表現しようもなく、人に訴えることもできない。それは「懐古」の悲哀でもなく「感物」の感傷でもない。心中に広がってとらえどころもなく、仁義にも遠ざかり、延年にもたがうもので、いやすこともできないものなのだ。

「宥情」に「襲予閒居するに、陰気沈沈として来りて心を襲う」というように、内に「陰気」を抱く者の「神思」は、つねに悲哀に満ちている。訴えることもできない悲哀の情は、「氤氤沈沈として以て其の根に返る」（「哀忍之華」）ように、再びみずからの心に返り、憂愁を増幅させる以外にないのである。銘に次のようにいう。

銘曰、熨而不舍、襲予其涼、咽而復存、媚予其長。戒神毋夢、神乃自動。黯黯長空、樓疏萬重。樓中有鐙、有人亭亭。未通一言、化爲春星。其境不測、其神習焉。峨峨雲王、清清水仙。我銘代絃、希聲不傳、千春萬年。

銘に曰く、熨むるも舍めず、予を襲いて其れ涼たく、咽ぐも復た存し、予に媚びて其れ長し。神を戒めて夢みる毋らんとするも、神は乃ち自ら動く。黯黯たる長空に、樓疏は万重なり。樓中鐙有り、人の亭亭たる有り。未だ一言を通ぜざるに、化して春星と為る。其の境測られず、其の神習う。峨峨たる雲王、清清たる水仙。我銘して絃に代うるも、希かなる声は伝わらず、千春万年に。

詩人の「神思」は、「故物」としてつねに心に取り付いて離れず、寄りそって存在する憂愁そのものである。「神思」が発動すれば、憂愁は果しもなく増大していく。それゆえに「神思」を戒め、その自由な飛翔を抑制しようとするが、詩人の「神思」は抑えようもなく動き出す。放たれた「神思」は黯黯たる長空を馳せ、思う人に心の苦しみを訴えようとするが、一言もかわさぬうちに春の星と化してしまい、「神思」は再びわが心に立ち返り、憂愁はさらに深まるのである。「写神思銘」には、救いのない憂愁からの解放を願いながら、憂愁を生み出す「神思」の発動を抑え切れない深刻な葛藤が語られているのである。

四

憂愁からの解放を願って、「神思」の発動を抑制しようとすることは、詩人として想像力を抑制することである。かくて、詩作は再び戒められねばならなかったのである。

自珍は三十歳から三十六歳にいたるまでに作った二百九十首の詩のうち、百二十八篇を録して「破戒草」と名づけ、それを区切りとして再び戒詩に入る。最初の戒詩は二十九歳（庚辰）のとき、それが破られたのが翌三十歳（辛巳）の夏であり、「破戒草」とはそれ以降、再度の戒詩にいたるまでの詩集の意である。その跋文には再び戒詩の誓いがなされている。

余自庚辰之秋、戒爲詩、於彼言語簡思慮之指言之詳、然不能堅也。辛巳夏、決藩枲爲之、至丁亥十月、又得詩二百九十篇。……而又詮次之、錄百二十八篇、爲破戒草一卷。……乃矢之曰、余以年編詩、閱歲名十有八。自今以始、無詩之年、請更倍之、惟守戒之故、使我壽考。汝如勿悛、勿自損也、俾無能壽考於而身、至於沒世。汝亦不以詩聞、有如徹公。道光七年丁亥十月丁亥日、龔自珍……自識。

余庚辰の秋より、詩を為るを戒め、言語を彼(つつ)み思慮を簡にするの指に於て之を言うこと詳かなるも、然れども堅くする能わず。辛巳の夏、藩枲を決して之を為り、丁亥十月に至るまで、又詩を得ること二百九十篇。……而して又之を詮次し、百二十八篇を録して、破戒草一巻を為る。……乃ち之に矢いて曰く、余年を以て詩を編し、歳名を閲すること十有八。今より以て始め、詩無きの年、請う更に之に倍せん、惟だ戒を守るの故に、我をして寿考なら使めよ。汝如し悛むる勿く、自ら損する勿くんば、能く而が身に寿考にして、世を没するに至る無か俾めん。汝亦た詩を以て聞えざること、徹公(6)の如き有らん。道光七年丁亥十月丁亥日、龔自珍……自ら識す

この二度目の戒詩は、二十九歳のときの戒詩とは少しくそのさまを異にしているように思われる。それは最初の戒詩が、湧き上る想念をむりに抑え、消し尽そうとしたものであるのに対し、二度目の戒詩は、信仰によってしだいに心の安らぎを得て来た結果としての戒詩であるという点においてである。

「自春徂秋、偶有所觸、拉雜書之、漫不詮次、得十五首」その十三には

心死竟何云　心死すれば竟に何をか云わん

結習幸漸寡　結習　幸に漸く寡し
憂患稍稍平　憂患　稍稍平らぎ
此心卽佛者　此の心　即ち仏者

といい、「結習」（煩悩）がしだいに少くなり憂患も平らいで、心は仏者のそれだとみずからいっている。その十四には、むかし「人生　字を識るは憂患の始め」（蘇軾「石蒼舒醉墨堂」詩）ということも知らず、文字のとりことなったが、幸いにも仏の教えによって、文字の束縛を脱し、憂愁の淵から救われようとしていると、次のようにうたっている。

危哉昔幾敗　危い哉　昔幾んど敗れ
萬仞墮無垠　万仞　堕つること垠り無し
不知有憂患　憂患有るを知らず
文字樊其身　文字　其の身を樊す
（中略）
聞道幸不遲　道を聞くこと幸いに遅からず
多難乃緣因　多難　乃ち縁因なり
空王開覺路　空王　覚路を開き
網盡傷心民　傷心の民を網尽す

さらにその十五には、今年こそ真の戒詩に入ることを宣言する。

詩はまず庚辰の年の戒詩にあたって作られた「戒詩五章」が、自分の心を説明するのにくどいものだったといい、続いて、自分のいいたいと思うことは古来明言し難いものであって、しばらく遠まわしにいおうとするが、それでさえいえずに声を呑むのだという。

鬼神ならば、わが心を察してくれるやも知れないが、しかし自分は鬼神に諒解してもらおうとも思わず、まして生きた人間に向ってわが心を説こうとは思わない。しかも、竜が東の雲に一鱗、西の雲に一爪と、その体の一部をのぞかせるように、わが心を断片的にしか表現できないのなら、いっそ表現しない方がましだし、まして表現が断片のさらに末端であるのならば、なおさらのことだ。懺悔は、まず文字のとりことなったことを第一として、詩作を断ち、心神を静めて煩悩と戦い、わが心を空虚にしよう。今年こそ真に詩を戒め、その結果、詩人として才能が尽きたとしてもどうして悲しむことがあろうか。

戒詩昔有詩　詩を戒めて昔詩有り
庚辰詩語繁　庚辰　詩語繁なりき
第一欲言者　第一　言わんと欲する者
古來難明言　古来　明言し難し
姑將譎言之　姑らく将に之を譎言せんとして

未言聲又呑　未だ言わずして声又呑む
不求鬼神諒　鬼神の諒せんことを求めず
矧向生人道　矧んや生人に向いて道うをや
東雲露一鱗　東雲に一鱗を露わし
西雲露一爪　西雲に一爪を露わす
與其見鱗爪　其の鱗爪を見さん与り
何如鱗爪無　何ぞ鱗爪無きに如かんや
況凡所云云　況んや凡そ云云する所
又鱗爪之餘　又鱗爪の余なるをや
懺悔首文字　懺悔は文字より首め
潛心戰空虛(7)　心を潛めて戦いて空虛にせん
今年眞戒詩　今年　真に詩を戒めんとす
才盡何傷乎　才の尽くるも何ぞ傷まんや

「才の尽くるも何ぞ傷まんや」とは、詩人としてのおのれを棄てて顧みないという、強い決意の表明である。この詩は再度の戒詩宣言なのである。

こうして「真の戒詩」に入ったのであるが、強い決意にもかかわらず、詩作が完全に断たれたというわけではない。その後、現存の編年詩を「龔自珍全集」（中華書局）によってみてみると、詩作の状況は次のようになっている。すなわち、三十七・八歳詩なし、三十九歳十四首(8)、四十歳四首、四十一・二歳詩なし、四十三歳三首、四十四歳詩なし、四十五歳一首、四十六歳一首、四十七歳九首となっている。これが四十八歳己亥の年になって突然「己亥雑詩」三百十五首がうたわれるまでの詩作状況であり、総数でいえば、十一年間に三十二首の詩が残されているのである。詩のほか、確実に制作年のわかる詞の作品は、四十九歳のときに「庚子雅詞」一巻三十五首が編まれるまで、四十一歳「洞仙歌」、四十四歳「洞仙歌」「百字令」、四十五歳「鳳皇台上憶吹簫」が残されている。

現存の編年詩および制作年が確定できる詞がない年は、三十七・八歳と四十二歳の三年間である。このことから、三十七・八歳には「真に詩を戒め」たものの、三十九歳以降、断続的に詩が作られていたことがわかる。これは戒詩と破戒との繰り返しとも見えるが、しかし「己亥雑詩」が作られるまでは、少数の作品はあるが、戒詩が持続されていたと考えてよいと思われるのである。なぜならば、三十六歳の戒詩以来、戒詩または破戒について述べることがなく、四十八歳の「己亥雑詩」にいたって初めて「弟去年出都の日、忽ち詩戒を破る」（「与呉紅生書」）といっているからであり、また詩作がきわめて断続的で、深い憂愁が詩人を詩作に駆り立てるという状態が見られないからであ

る。

戒詩の持続はそのまま憂愁の解消や精神の安定を意味するものではないと思うのであるが、しかし、詩人としての龔自珍はその存在を希薄にし、より深く信仰の世界に入っていったことは確かである。

五

自珍は三十八歳の春に、ようやく六度目にして会試に合格した。しかし「干禄新書自序」(9)に「殿上三試、三たび及格せず」というように、会試覆試、殿試、朝考の三試に合格せず、翰林院入りを果せなかったのである。その理由は「楷法光緻」(「干禄新書自序」)でなかったからである。つまり、書法が端正謹厳で規格に合ったものでないという、つまらぬ理由からであった。呉昌綬の「定盦先生年譜」道光九年己丑(三十八歳)の条には、朝考における「安辺綏遠」の対策(「御試安辺綏遠疏」)は、閲巻の諸公を驚ろかしたが、「卒に楷法程に中らざるを以て、優等に列せられず」と述べられている。その結果、翰林院入りは果せず、国政の表舞台に立つことはできなくなったのである。

朝考のあと、知県任用の沙汰が下ったが、自珍は辞退して中書の原職にとどまることを決意する。いまさら地方官に出る気になれなかったこともあるであろうが、何よりも京師にいてこそ、みずからのなすべきことをなし得ると考えたからではないだろうか。朝考における閲巻大臣を驚かせた対策も、この年の十二月に軍機処と内閣との関係などについての改革を具申した「上大学士書」もいずれも自珍の経世済民の志に出るものというべきであろう。戒詩によって詩人としてのおのれを棄てても、なお憂国の情から政治への参画を希求していたのである。しかし自珍は政治の舞台で活躍することもなく、官歴も四十四歳のとき宗人府主事、四十六歳のとき礼部祠祭司主事、同年、主客主事(いずれも正六品)となったのに止まる。

さきに述べたように、三十六歳の再度の戒詩以降、みずからの胸中を語ることが極めて少ないのであるが、それでも時にその苦渋を詩にうたっている。たとえば四十三歳のときの「題蘭汀郎中園居三十五韻」(蘭汀郎中の園居に題す三十五韻)には次のようにうたわれている。

山林與鐘鼎　山林と鐘鼎と
時命視所遇　時命　遇う所を視る
菀枯良難論　菀枯は良に論じ難く
神明各成痼　神明　各おの痼を成す
我當少年時　我　少年の時に当りて

盛氣何跋扈　盛気　何ぞ跋扈せる
妄思兼得之　妄思　兼ねて之を得
咄咄託豪素　咄咄　豪素に託す
蹉跎復蹉跎　蹉跎　復た蹉跎
造物尚我妬　造物　尚お我を妬む
一官蝨人海　一たび蝨人の海に官たり
開口見牴牾　口を開けば牴牾に見う
羽陵雖草創　羽陵は草創と雖も
江東渺雲樹　江東　雲樹渺たり
經濟本非材　経済は本と材に非ず
進退豈有據　進退　豈に拠る有らんや
羸馬嘶黄塵　羸馬　黄塵に嘶き
默默入冷署　黙黙として冷署に入る
居然成兩負　居然　両つながら負かるるを成し
有若沾泥絮　泥に沾れし絮の若き有り

「盛気の跋扈」する少年であった自珍は、蹉跎に蹉跎を重ねて、微官のうちに才をすり減らし、今やみずから「経(世)済(民)は本と材に非ず」とまでいい、「羸馬」にまたがって黙黙と冷たい官署に入るのである。朝廷での活躍も山林での幽居も、ともにその志は遂けられず、泥中の柳絮のようになってしまったとうたう自珍の胸中は、いかに悲痛であることか。

しかし、かつてのようにその憂愁をうたわず、帰隠の夢も果さず、「壯にして祠曹と為りて黙すること益ます堅」[11]い生活を送り得たのはなぜであろうか。それはかれの仏教信仰の深まりと関わると思われる。

自珍は四十歳のとき、発願して「抜一切業障根本得生浄土陀羅尼」五十九言四十九万巻を誦せんと願い[12]、四十二歳のときには「始めて天台の書を読む」[13]ことになるのである。四十六歳のときには「妙法蓮華経四十二問」をはじめとして、多くの仏教関係の著作があり、また「己亥雑詩」其七十八[14]の自注には「丁酉九月二十三夜、寐ねずして、茶の沸く声を聞き、衣を披て起つ、菊の影扉に在り、忽ち法華三昧を証す」[15]と述べている。呉昌綬「定盦先生年譜」にいうごとく、悟境の深まりを示すものであろう。戒詩の持続は悟境の深まりと密接に関わると思われるのである。

六

戒詩の持続により詩人としての存在を希薄にし、仏者として信仰の世界に入った自珍の生活は、決して平穏に過ぎたのではなかった。それは間歇的に作られた詩の中に、外部からの政治的圧力があったことを推測させる作品がある

からである。

四十六歳の三月、自珍は礼部主事祠祭行走に改められ、四月に主客司主事に補せられ、祠祭司を兼ねた。さらに湖北の同知に任ぜられたが辞退して原官に留まった。この地方官選任のことは、自珍を京師から遠ざけようとする者たちの画策であったかも知れない。

この秋、自珍は京師を一時逐われている。この年の作品「題王子梅盗詩圖」には

歳丁酉初秋　歳丁酉　初秋
龔子爲逐客　龔子　逐客と為る
室家何搶攘　室家　何ぞ搶攘なる
朝士亦齷齪　朝士も亦た齷齪
古書亂千堆　古書　乱るること千堆
我書高一尺　我が書　高きこと一尺
呼奚抱之走　奚を呼びて之を抱きて走らしめ
播遷得小宅　播遷して小宅を得たり

とうたわれていることから、京師を逐われた情況が非常に緊迫したものであったことが推測されるのである。また四十七歳の作品「乞羅保陽」（羅を保陽に乞う）四首その一には

今年奪俸錢　今年　俸銭を奪わる
造物鈹弄巧　造物　巧を鈹弄す

とうたっている。俸銭を奪われ、友人に食を求めて「西行すること三百里、遂に保陽（河北省保定市）の道に抵」った隠れた事件が、どういうものであったか不明である。しかし、それが政治の現状に対する自珍の忌憚のない意見と深く関わっているであろうことは、十分に考えられるのである。自珍はこの年の正月に礼部に上書して政治改革案を具申しており[16]、これも俸銭を奪われる一因であったかも知れない。あるいはまた、アヘン禁止を主張することへの圧力であったかも知れない。

林則徐がアヘン禁止のため欽差大臣として広東に派遣されることになったのは、この年、道光十八年十一月十五日のことであり、十一月二十三日の出発にあたって自珍は「送欽差大臣侯官林公序」を書き、その中で激しい禁烟論を展開している。また「乞羅保陽」其の四にも次のように うたう。

昨日林尚書　昨日　林尚書
銜命下海濱　命を銜んで海浜に下る
方當杜海物　方に当に海物を杜ぎ
氂毳拒其珍　氂毳　其の珍を拒むべし
中國如富桑　中国　如し桑に富めば

夷物何足攜　夷物　何ぞ攜うに足らん

詩中の「海物」はアヘン、「氄毳」は輸入される毛織物をさし、「富桑」は養蚕の振興についていうものである。アヘン厳禁を上奏した黄爵滋や、その主張を支持して欽差大臣として広東に赴くことになった林則徐などと同じく、自珍も禁烟論を主張したが、そのために保守派からの何らかの圧力があったことは十分に考えられるのである。

翌道光十九年己亥、四月二十三日、自珍は官を辞し「眷属傭従を攜えず、一車を以て自ら載し、一車に文集百巻を載して」（呉昌綬「定盦先生年譜」）都を離れる。七月九日、郷里杭州に帰り、しばらくの後、家族を迎えるために北上するが、ついに入京することなく、家族を迎えると再び南下し、崑山の羽琌山荘に住むことになるのである。このあわただしい単身での出京と、再び入京しなかったことの裏には、何か容易ならぬ事件があった可能性があるが、自珍はそれについて何も語らないのである。

出都の日、ついに詩戒は破られ、三百十五首に及ぶ「己亥雑詩」が作られる。翌年に書かれた「与呉虹生書」十二には次のように述べられている。

弟去年出都の日、忽ち詩戒を破る。詩一首を作る毎に、逆旅の雞毛の筆を以て帳簿の紙に書し、一破籠中に投ず。往返すること九千里、臘月二十六日に至り海西の別墅に抵り、籠を発きて之を数うるに、紙団三百十五枚を得。蓋し詩を作ること三百十五首なり。

憤懣と憂愁を抱いて過した二十年におよぶ京師での暮し、それを棄てるに当って、信仰によって平静を得られていたかに見えた詩人の心は、再び波立ち、湧き上がる想いは抑えるすべもなかったのである。「己亥雑詩」の冒頭の詩には

著書何似観心賢　書を著すは何ぞ心を観るの賢に似んや
不奈厄言夜湧泉　奈んせん　厄言　夜泉を湧かすを

百巻書成南渡歳　百巻の書成る　南渡の歳
先生續集再編年　先生の続集　再編の年

とうたわれている。

詩人として書を著わすのは、信仰者として自分の心を観照し見すえることの賢明さに及ばないけれども、夜になると「厄言」が泉のように湧き上がるのをどうしようもない。「厄言」は「荘子」寓言篇の語で、対象に応じた融通自在のことばの意であるが、この詩では想念に応じて次々に湧き出てくることばをいうのであろう。「百巻の書」を一車に載して南渡するこの年こそ、わたしの続集が再び編まれる年なのだ。

自珍は湧き上る「卮言」を抑え切れず、仏者としての沈黙を棄て、再び詩人として表現の世界に立ち返った。しかし「神思」を駆せても、かつてのように、憂患を抱いて「文字の海を飄零」することにはならない。七言絶句の形式をもって想うがままにうたい続けて行く「己亥雑詩」には、現実に対する激越な詩も時には見られるけれども、深い憂愁に閉された心をうたうものはないといってよい。

再度の戒詩は、「憂患稍稍平らぎ、此の心即ち仏者」となった結果として、間歇的な詩作はあるが、持続されてきた。「己亥雑詩」にいたって戒は破られるけれども、しかしその背後には確たる信仰の世界があり、それによって心の平衡が保たれていたからこそ、再び憂愁の淵に沈むことがなかったのだといえると思うのである。かれは吟じ終ると「天台七巻の経」(法華経)に礼拝し、再び仏者の沈黙に返ってしまう。「己亥雑詩」は次の詩をもって結ばれる。

吟罷江山氣不靈　吟じ罷りて江山気霊ならず
萬千種話一燈青　万千種の話　一灯青し
忽然閣筆無言說　忽然筆を閣きて言説無し
重禮天臺七卷經　重ねて礼す　天台七巻の経

この詩は「己亥雑詩」をうたい続ける詩人の背後にある確たる信仰の世界の存在を示している。憂愁ゆえの戒詩と破戒は、ここにいたって信仰の世界に収束され終りを告げたというべきであろう。

(国学院大学)

注

(1) 『定盦先生年譜』に二十八歳「春應恩科會試、不售」、二十九歳「會試仍下第、筮仕得內閣中書」、三十一歳「是歳成廟登極恩科、應會試未第」、三十二歳「春、在都供職、會試未第」、三十五歳「會試不第」とある。二度の恩科を含めて、この年五度目の会試受験であった。

(2) 「左傳」昭公二十四年に「嫠は其の緯を恤えずして、宗周の隕ちんことを憂うと。将に及ばんとするが為なり。今王室実に蠢蠢たり。吾が小国も懼る。然れども大国の憂いなり」とあるのにもとづく。

(3)(4) 郭延礼「龔自珍詩選」の注に「看花二句、用事關國防和民生的兩大事件」といい、「黄河、指嘉道年間黄河連年泛濫成災」「西秦、陝西、此泛指中國西北部地區。按指張格爾叛亂事」とする。

(5) 「寫神思銘」中の「神明」は、「自春徂秋、偶有所觸……得十五首」その六に「神明甘如飴、何處容隱痛」とあり、「黯黯長空、樓疏萬重、樓中有鐙、有人亭亭、未通一言、化爲春星」は、「有所思」(三十五歳)に「文字都無著、長空有所思」「終古天西月、亭亭悵望誰」、「美人」(三十五歳)に「美人清妙遺九州、獨居雲外之高樓」、また「私心三首」(三十五歳)其の三に「起看歷歷樓臺外、窈窕秋星或是君」とあり、「峨峨雲王、

清清水仙」は、「夢中述願作」（三十五歳）に「乞貌風鬟陪我坐、他身來作水仙王」とある。

（6）「龔自珍全集」（中華書局一九七四）の王佩諍の校注に「際醒、字徹悟。著夢東禪師遺集（即徹悟禪師語錄）」とある。

（7）この句については、「戒詩五章」其の二に「今誓空爾心、心滅淚亦滅」（今誓って爾の心を空にせん、心滅せば涙も亦滅せん）とあることなどから、「心神を静めて煩悩と戦いわが心を空虚しよう」と解した。ただし、諸家の説に大きな違いがあるので以下それを示す。田中謙二「龔自珍」（中国詩人選集、岩波書店）には「○潜心　胸中の意見を秘めて発表しない。○空虚　みずからがつくる実体のないかげ、仮象をいう」といい、「胸のおもいを秘めたまま、みずからえがく仮象と対決しようとおもう。」と解する。劉逸生注「龔自珍詩選」（浙江人民出版社　一九八〇）には「懺悔兩句、因此要懺悔過去所寫的文字、定下心神、鍛煉進入空虚的境界。意指修煉佛法。」と解し、郭延礼選注「龔自珍詩選」（斉魯書社　一九八一）には「懺悔二句、要悔改首先要戒詩、專心一意地戰勝內心的空虚孤獨之感」と解する。

（8）「龔自珍全集」で庚寅（三十九歳）に編入されている「飲少宰王定九丈鼎宅少宰命賦詩」（少宰王定九丈鼎の宅に飲む、少宰詩を賦するを命ず）は、郭延礼の「龔自珍詩選」では、一八一九年（自珍二十八歳）の作であるという考証がある。

（9）道光十四年、四十三歳の作。殿試における失敗の経験から子孫のために受験の書法を論じたものであるが、自序を残すのみである。

（10）「羽陵」は、自珍が江蘇省崑山県の崑山に作った山荘をさす。陵は琌とも書く。自珍は、羽琌山人とも号する。

（11）「己亥雜詩」其二百八十二に「少爲賤士抱弗宣、壯爲祠曹默益堅」（少くして賤士と為り抱宣べず、壯にして祠曹と為り黙すること益ます堅し）とある。

（12）「誦得生淨土陀羅尼記數簿書後」（得生浄土陀羅尼を誦して数を簿に記し後に書す）に「龔自珍以辛卯歳發願、願誦大藏貞字函拔一切業一切業障根本得生淨土陀羅尼五十九言四十九萬卷……限戊戌歳畢之」とあり、また「己亥雜詩」其二十二の自注に「予持陀尼已滿四十九萬卷、乃新定課程、日誦普賢・普門・普眼之文」とある。

（13）「闡告子」の末尾に「予年二十七、著此篇。越十五年、年四十二矣。始讀天台宗書、喜少作之闇合乎道、乃削剔蕪蔓存之。自珍自記。癸巳冬」とある。

（14）「己亥雜詩」其七十八「狂禪闢盡禮天台、掉臂琉璃屏上回、不是瓶笙花影夕、鳩摩枉譯此經來」（狂禪闢け尽して天台に礼す、臂を琉璃の屏上に掉いて回る、是れ瓶笙花影の夕ならざれば、鳩摩枉しく此の経を訳し来る）。

（15）道光十七年丁酉、四十六歳の条に「先生究心大乘、纂述甚富、雜文存目又五十餘篇。九月二十三夜、不寐、聞茶沸聲、披衣起、菊影在扉、忽證法華三昧、自是益臻悟境矣」という。

（16）呉昌綬の「年譜」四十七歳の条に「正月、上禮部堂上官書、論四司政體宜沿宜革者三千言」とある。